



4年後の東京オリ・パラ



逢見事務局長の9

ココ
だけの
新

一般人には真似できない
アスリートの技術に魅了され

2016リオデジャネイロ・オリンピックが終わり、9月からはパラリンピックが行われました。パラリンピック (Paralympic) とは、「もう一つの (Parallel) + オリンピック (Olympic)」という意味で、オリンピック大会終了後にその開催都市で行われる障がい者のスポーツ大会です。もともとは障がい者のリハビリのための大会だったようですが、健常者のレベルを超えている選手もいますから、そのうち区別がなくなるかもしれません。

私はスポーツジムでランニングをしながら、オリンピック陸上の400m走を見ていましたが、私が200mも走らないうちに、選手たちは400mを走り抜いていました。

アスリートの技術は一般の人間では真似のできない領域に至っています。100mを10秒以下で駆け抜けたり、テニスでは時速260kmを超えるサーブスを打ったり、体操では「伸身エルチェンコ3回半ひねり」などの新しい技が披露されました。卓球は2000年のルール改正で、ボールの直径が38mmから40mmに一回り

大きくなって、テレビの映像も以前より多少見やすくなったようですが、私には玉の回転の違いがさっぱりわかりませんでした。

悲しい歴史を経て
東京での「平和の祭典」開催へ

4年後の2020年には、東京大会が開催されます。10月10日は、1964年東京オリンピックの開会式が行われた日で、「体育の日」として国民の祝日になっています。「スポーツの日」ではなく、「体育の日」というのも、「モーレッツ」な時代を感じさせます。

当時、私は小学校5年生でした。先生の引率で、日の丸の小旗を持って聖火リレーを見に行きましたし、授業時間中も特別にテレビを見せてもらったことを覚えています。日本で最初の金メダルを獲ったのは、重量挙げの三宅義信選手でした。リオで銅メダルを獲った三宅宏実選手の伯父さんにあたる人です。体操では日本選手団長を務めた小野喬選手が、肩の痛みに耐えながらも、鉄棒ですばらしい演技を見せてくれました。女子バレーボールでは、「東洋の魔女」と呼ばれたニチボー貝塚の選手たち

が回転レシーブを駆使して戦いました。外国人選手では、柔道の無差別級で神永昭夫選手を破ったオランダのヘーシンク選手、すごい大男でした。体操女子のチャスラフスカ選手、美人でしたね。学校でチャスラフスカと嘯まうに言えるかどうか、みんなで競争になりました。先日、亡くなったという報道がされました。

4年に1度、全世界の人々に勇気と感動を与え、世界平和を謳うオリンピックですが、その時代が抱える問題も背負っています。今回のリオでは、自分の祖国から出場できない選手たちが、「難民選手団」として出場しましたし、ドーピング問題も大きな衝撃を与えました。日本は、1940年に東京で開催される予定だったオリンピックを戦争のため中止せざるを得なかったという悲しい歴史も持っています。4年後、東京での「平和の祭典」が今から楽しみです。

「2020東京オリンピック」と掛けて、「出番を待つ役者」と解きます。そのココロは、
支度するのに余念(4年)がありません。

